

## TOPICS

## 気仙沼での医療支援活動報告

野口 雄一（大学病院 内分泌内科・糖尿病内科）

平成23年4月25日から5月1日まで、大学からの派遣要請に応募して東日本災害支援に参加させていただいた。阪神大震災の時に次回の震災派遣要請があったときは参加しようとしていたこと、祖母が宮城県出身であったことなどが、今回の私の参加の動機となった。埼玉医科大学からの派遣はすでに3月から始まっていたが、本院からの派遣が本格化したのは4月に入ってからでした。われわれの斑は、私に加えて菅原通子（消化器内科・肝臓内科）、佐藤智也（形成外科・美容外科）、新澤 麗（産婦人科）、小牧 健（小児科）、山下博栄（神経精神科・心療内科）の医師6名、斉藤宏美・西村むつみ看護師、永野浩之薬剤師の合計9名での派遣となった。

気仙沼総合体育館（以下通称ケイウェーブ）避難所内での活動は、4月4日から派遣の皆川医師を代表とする部隊が埼玉医大が3病院のリーダーとして活動する基本形を作られていた。私共は前任の総合医療センター救命センターの安藤陽司医師らからリーダー業務を引き継いだ。到着時点で既に震災発生から1月以上が経過したため、‘町’としてのケイウェーブは衛生面でも落ち着きを見せ、以前認められたような感染症の集団発生などはなくなっていた。住民の数も震災直後、1100人規模であったものが一部の住民は親戚や知人に引き取られたりして引継ぎ時の入居者は740人程度になっていた。ここでの問題点は家族と生き別れになった高齢者、介護の必要な方などが多数残ってしまっていたことだ。

内科外来の2ブースを主に埼玉医大と富山大学、東名厚木病院が交互に対応にあたった。先発隊からの報告では医療支援自体が縮小傾向でケイウェーブもその方向でとの申し送りであった。それでも、我々が担当後の一日の外来人数は一般内科外来が中心で一日平均35人程度の外来数であった。朝の健康プラザ（気仙沼保健所）での気仙沼市に派遣された医療者全体の会合に出席すると解るのだが、状況は日々、刻々と変化しており、医療ニーズも明らかに急性疾患から慢性疾患の経過観察に移行していた。震災から一月以上経過したため、主治医不在や、移動手段がないことが原因で内服薬の中断などをされている方も数多くいら

した。どこの施設でもこのような内服中断、もしくは長期の避難生活に伴うストレスなどが原因で血圧のコントロール不良な患者さんなども多いことが報告されていた。夜間帯、毎日一人程度の急患が市民病院に救急搬送される事態が生じていた。ケイウェーブでの内科診療は主に菅原医師が、高血圧、糖尿病などの慢性疾患は野口が行い、子供連れの患者さんは、内科と小児科の小牧医師で、不眠などの訴えのある方は山下医師も、婦人科相談は新澤医師がといった具合に理想的な総合診療のような対応が可能となり、大変感謝されたことを実感した。特に外来でインスリンの導入を同行の二人の看護師の助けを借りて行ったり、高血圧患者の相談を受けたりした業務は忘れられない経験となった。

先発隊の情報では、今回、マイナー科の医師の診療活動は人数が足りており、不要である可能性が高いとの前触れであった。しかし、現地を訪れ注意深く状況を把握すると、実は他大学等のDMATチームなどは以前より継続して活動されてはいるものの、チームの交代が4日ごとであるのが基本であった。その場合、依頼元の気仙沼市側も、申し送り後実質2日の活動では申し送りに要する手間暇が大変なため、なかなか細かい依頼ができないのが現状であった。このような実情を踏まえ、こちらから必要であろう業務を探し出し、直接担当者へアプローチする手法もとった。例えば、精神科の山下先生を自治医大のこのころのケアチームについて参加させていただくように依頼をした。形成外科の佐藤医師には我々と途中から別行動で、地元の保健師と一緒に老人病院などの施設を廻っていただき、一日7人程度の褥瘡の処置を行ってもらった。気仙沼市民病院の婦人科はたった二人の医師が交代で外来と当直をこなしていることを新澤医師が確認したため、同医師は、一日の日勤、当直のボランティアを志願された。

今回のもう一つの大きな仕事として、埼玉医科大学が行ってきた気仙沼での支援活動の総仕上げとしての撤退、他施設への業務申し送りという任務があった。共に活動していた東名厚木病院、富山大学医学部、埼玉医大スタッフ全てが同時に4月いっぱい

で引き上げることが問題で、引き継ぎ先を予定する病院も、我々が撤退する直前まで決定しなかった為、大変心配だった。だが、東京都のまとめ役の方々と相談の上、今後5月以降担当となる、横浜市大のグループ、と東京都医師会のグループに4月30日最終活動日の丸一日を費やしこれまでのシステム等を申し送ることができた。今回の活動拠点のケイウェーブは今後も他の定点が落ち着き撤退した後も、最終的にここに集約して約2年の予定で残る可能性が高いと聞き、薬剤は必要なものについては十分に残すという方針に変更、当院の永野薬剤師と富山大学の薬剤師のお二人が大活躍され、薬剤の整理を行って大変使いやすい診療所施設として申し送りを行えたことは幸いであった。カルテのシリアルナンバーも引き揚げ時700人を超えていたように記憶している。

最後に、今回の活動を通じ、医師、看護師、薬剤師一人一人が何かしらの手ごたえ、やりがいを感じて帰院されたことがなよりの成果であった。先方

より、薬剤師も含め、事務の出来る方の参加も求められていたが、実際、今回は東名厚木、富山大学の事務の方にも大変お世話になりました。約2ヶ月の間にケイウェーブ診療所を受診された患者さんの数も相当な人数となりカルテの整理が必要であったが、エクセルを用いたカルテは丁寧に紙カルテベースとリンクして整理され、今後近隣の医療施設が復活された場合への十分な資料ができあがっていたことを確認し現地を去った。後日、ケイウェーブで診療にあたった92歳の女性から私あてに、気仙沼での活動に対して感謝のお手紙をいただいた。そこには‘海の街’気仙沼が漁港の応急処置から復興が始まりつつあること、だが、その処理に必要な加工施設などは総て失われていて街全体の機能復興には気の遠くなるような永い年月がかかるであろうこと、でも近隣の方々と出来ることから始めて復興する強い意志が綴られていた。これからも東北全体の復興には永く継続した支援が必要であることを身をもって実感しました。



写真 1. K-WAVE 内の診療スペースでの診察。



写真 2. K-WAVEをバックにしてスタッフ一同。